



# 次回例会のご案内

是非ご出席ください！ 課題を共有しませんか？

日時：2月8日(月) 午後7時～9時

会場：愛宕町教会

奨励：小林 恵 先生(南甲府)

発題：「**高齢化問題の行くえ**」  
～これまでの経験を通して～  
**信田悦子姉 やすらぎの家(南甲府)**

## 本会の趣旨は：

今、山梨県下のキリスト教関係学校、施設等が一同に会して互いの情報を交換する場がありません。このことは、各団体等が今の時代の中で孤独に自らの使命を果たすことになり、孤立感が大きいといえます。

改めて、県下のキリスト教諸団体が集まり情報の交換と結びつきを強めていく場を持つことで互いに愛し合い、支えあい、仕え合うことができると願っています。互いに会し、自らの課題を率直に語り合う中で、明日の展望を開くとともに、山梨県下のキリスト教の進展に寄与したいと思います。(北 紀吉)



### 2009年度の組織会

連絡会代表：小島章弘

連絡会委員：

清藤城宏(書記) 横山文彦

古屋秀樹(会計) 北 紀吉(顧問)

鈴木信行

### 編集後記

・高校生の時、よく賀川豊彦のことは牧師から聞かされ、賀川豊彦伝も読んだ記憶があります。その著者が今回発題の横山さんのお父さんだったとは驚きでした。「どんぐり牧場」のこれまでは、大変なご苦労があったとおもわれます。しかし横山さんからは、前向きで使命感が伝わり多くのことを考えさせられる素晴らしいお話でした。(清藤)



Tomosibi **灯** Tomosibi

山梨県キリスト教連絡会

2009年10月設立 代表 小島章弘

事務所：〒400-0024甲府市北口3-4-23 日本基督教団 愛宕町教会内 Tel 055-253-3150

### <聖句>

使徒言行録6：1～7

1 そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。

2 そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。

3 それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。4 わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」5一同はこの提案に賛成し、信仰と聖霊に満ちている人ステファノと、ほかにフィリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、アンティオキア出身の改宗者ニコラオを選んで、6使徒たちの前に立たせた。使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた。7こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った(船戸先生の奨励聖句)

## もくじ

### NEWS LETTER N0.2

- ☆聖句・第二回例会報告・・・・・・・・・・・・・・ 1
- ☆奨励「信仰と奉仕活動」船戸良隆牧師・・・・・・・・ 2
- ☆発題「どんぐり牧場」横山文彦兄・・・・・・・・ 2-3
- ☆次回のお知らせ・・・・・・・・・・・・・・ 4
- ☆本会の趣旨・・・・・・・・・・・・・・ 4

### 第2回例会報告

12月7日午後7時から愛宕町教会にて14名の参加者で第二回目の集会を持った。

先ず開会礼拝をおこない、讚美と船戸良隆牧師の奨励で御名を崇めた。引き続き代表の小島章弘牧師が前回同様キリスト教諸団体、キリスト者の横のつながりを強くし、主のご委託に応える会として育てていきたい旨を熱い思いで語られた。

今回の発題は、どんぐり牧場の代表者横山文彦兄(大月新生)より「どんぐり牧場」と題して、

賀川豊彦との出会い、敷島教会(世田谷2005年解散)での信仰生活、福祉への目覚め、父による影響が語られた。そして40年前からどんぐり牧場を立ち上げ精神障害者を受け入れ、献身と自己犠牲で取り組んでいることを淡々と述べられた。

山梨にそのような先駆的働きがあることに多くの者が感動し大いに刺激を受けた。一同讚美をささげ、祈りを持って閉会となった。

## 奨励「信仰と奉仕活動」使徒言行録6:1~7 船戸良隆牧師(大月新生)

ACEF(アジアキリスト教教育基金)のスタディーツアーに参加した大学生が献身し、東神大で賀川豊彦を研究したいと言ってきた。隅谷三喜男先生の賀川豊彦に対する評価は、神学的(信仰的)というよりも信仰に基づいた社会運動家として、貧しい人たち、虐げられた人々に手を差し伸べたということで、日本のキリスト教史において、ひとつの位置をしめしていると述べておられる。

聖書の世界では、旧約時代から貧しい人々に手が差し伸べられていた(申命記15:7~11)。施しは、重要な概念である。それを引き継いで、マタイ25:31~46にある最後の審判における裁きの基準を語ったイエスの教えがある。

初代教会における救貧運動が、使徒言行録6:1~7に書かれている。ディアスポラのユダヤ人からの苦情

にどのように対処し手を差し伸べたのか。使徒たちは、神の言葉をないがしろにするのは良くないので、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を選び、彼らにその仕事を任せた。教会における奉仕活動(ディアコニア)の中心はなにか。学校、病院、社会事業等々は何のためにあるのか。自分が事業をやる時、事業が大きくなっていくことに心ひかれる。それは何のためにやっているのか、方向を見失ってはならない。礼拝を中心とした生き方を第一とすることが最も重要である。(まとめ清藤)



## 第2回例会発題報告

### どんぐり牧場 —あゆみを振り返って— 横山文彦(大月新生)



2006(H18)年6月に大月新生教会に転入会しました。まだ山梨分区3年生です。1969(S44)年から知的障がい者と養鶏を中心とした農業協働生活体「どんぐり牧場」を創業して40年経過しました。私は世田谷にある日本基督教団敷島教会で高校3年生の1960(35)年のクリスマスに洗礼を受けました。敷島教会は大連中央教会の磯部敏朗牧師が引き揚げてこられ、賀川豊彦先生の松沢教会に隣接する桜上水の自宅で1955(S30)年に礼拝を始められ、私は高校生になった1958(S33)年に礼拝に出席するようになり、12月に会堂が完成し、翌年に献堂式が行われ、賀川豊彦先生の記念説教があり、私は鐘を引き鳴らす役目を務めました。

磯部先生からクリスチャンとして教えられたことは“献身と自己否定・自己犠牲”でした(マタイ16:24-26)。高校生時代、KKSの教えを2年続けて白樺湖のほとりの建物で3泊4日で受けました。修養会の最後の晩には、献身に身をささげる決心をした覚えがあります。野村牧師に相談したり、教会の一室を借り、近くの日大心理学課に通い、卒業後精神薄弱児施設で働いていた方に泊りがけで相談したりして、こころ秘かに精神薄弱の人と係わる仕事を通して神に喜ばれる一生を送りたいと考えておりました。敷島教会は「どんぐ

り牧場」を始める時、総会で「どんぐり牧場」の事業は教会の事業であると決議してくれ、野村牧師が大月まで家庭集会に毎月訪ねてくれました。「どんぐり牧場の構想」は父のもので、それをわれわれ夫婦で実行に取り組んだのでした。決して忘れられない思い出です。操業資金は父が蔵書売って用意することだったので駄目で、しかたなく岳父に建設資金の一部を依頼した時に「事業とは、事業計画、資金計画があって始めるものだ。君の理想は高いが事業としてはならない」と言いながら、資金を用意してくれました。確かにそうだ、だから借りた金は、100を200にも300にもなるように活用しよう。

こう誓って今日までやってきました。新聞に「古材をください」と投書して、東京都内から建物の古材をもらって来て家を建てました。古材だからといって、決してタダではない、自動車のガソリン代も、人手もかかっているのだから、もらってきた古材だって無駄には出来ない。何とか100%以上に活用しなければと、工夫してきたのです。あるのは気力だけでした。年月を重ねるとともに、家族も増え、青年達仲間も増えて、住宅や鶏舎、作業棟倉庫等で、2000㎡の敷地がすっかり手狭になってしまいました。又、各地からやってくる体験学習やボランティアも増え、宿泊所も不足がちになり、規模拡大を夢見て、新たな土地を求め、同じ大月市内の真木の集落の上に隣接する二つの尾根、二本の小さな沢が流れ

る、南真正面に富士山がくっきりと見える風光明媚な格好な山林(約7000㎡)の「第2のどんぐり牧場」が与えられ、出来るだけ、造成・建設等を自家労力、手作りで行き、資材費だけで済ませました。3~4年に1人、日帰りの実習から日数を増やし、最終的に1ヶ月を2回繰り返し、本人の意志を確認して、正式な仲間として受け入れてきて、その仲間が生活と作業に慣れ親しんで、先輩として成長が確かめられ、経済的にも確信が持てたら次の仲間を、と丁度一般家庭の子育てに似た感じで、出入りもありましたが、現在7名の仲間と生活を共にしています。一番古い人は43年間一緒に生活しています。やまびこ養護学校卒業の都留市出身の女性がどうしても「どんぐり牧場」に関わりたくて希望し、ならば通所部門を開所しよう、お手の物の材料の卵を使って、おやつケーキ・クッキーを作って食べていたのを、



技術を高め生産につなげようと、真木福祉作業所を併設したのが、現在の社会福祉法人芽生福祉会・就労支援事業所「めばえ」です。大月市内から10数名の人達が通所してきて、国内産小麦粉使用の天然酵母パン、ケーキ、クッキー、ラスク等生産、販売をしています。

私の父は「賀川豊彦伝」を書いた横山春一です。家族が順番で「賀川豊彦先生の健康とお仕事をお守りください」と祈るほど賀川一色の家庭でした。父横山春一は1911(M44)年生れです。1927(S2)年16歳の時に北海道・滝川教会で信仰にふれ受洗へと導かれ、1929(S4)年明治学院神学部へ進んだのですが、健康を害して退学し1931(S6)年北海道・江部乙村に3町歩の土地を買ってもらい『土への愛・隣人への愛・神への愛』の三愛主義を掲げる“芽生村塾”を立ち上げ、同志の人と北海道の農業生産を稲作から酪農・果樹作物へと換えていこうと希望多く始めたのでした。この年、北海道に賀川先生が講演で訪れ、芽生村塾のことを耳にして訪ねて下さり、父はすっかり賀川先生の『農民福音学校』運動に傾倒し、準備を重ねて1935(S10)年に北海道農民福音学校を開設したのですが、1940(S15)年には政情・戦雲が厳しくなり、知り合いの憲兵の勧めで、教会の人々に挨拶する間もなく、放棄して東京に出て行き、1941(S16)年に満州基督教開拓団を引率して、1944(S19)年に農業技術者としてタイへ行き1946年(S21)に世田谷に帰国しています。帰国後から「賀川豊彦伝」の執筆に取り掛かり1950(S25)年に書き下ろし、(新約書房)から出版、翌年に(キリスト新聞社)から再版を出した後、1952(S27)年に「イエスの友の会」代表で感謝使節としてアメリカを訪問ブラジルを回って翌年に帰国しています。帰国後、世田谷で「武蔵野農民福音学校」「日曜学校」、1954(S29)年頃「祖師谷保育園」、1956(S31)年頃から磯部敏郎牧師を迎えて「祖師谷伝道所」を開設し、1959(S34)年に(警醒社)から索引を付した大幅増補版の「賀川豊彦伝」を箱入りで出版しています。

賀川先生からの支給は生活費がやっとなので、私達4人の子供の教育費までは充分でなく、そこで家族の経済を支えるため、多数飼育の養鶏に取り組みはじめ、子供達は朝晩の学校に通う時以外は女子は家事を男子は家業となった養鶏を手伝いました。これが大学を卒業するまで続き、いやでいやでしかたがありませんでしたが、これが「どんぐり牧場」の事業に取り組む時には基礎になったのです。賀川豊彦先生は1889(M21)年に誕生され、先生が活躍しておられた時代に、既に1891(M24)年には滝乃川学園が石井亮一先生によって事業がなされていて、他にも藤倉学園、家庭学校、等の慈善事業・社会事業が存在していたのです。父は明治学院時代、新宿のドヤ街でセツルメント活動に加わり、先輩の高嶋巖先生の指導を得て、子供達に勉強を教えた時の国語読本“かしの木としいの木”の章のかしの木の実の「どんぐり」が「どんぐり牧場」の名前の由来となっています。養鶏が軌道に乗ってきた時に、養護施設双葉園の園長になっていた高嶋巖先生の「精神薄弱者コロニーで多数飼育養鶏に取り組んでいるがうまくいっていない、横山養鶏場で知恵遅れの人を面倒見たら」の提言が『どんぐり牧場の構想』に父の気持ちを揺れ動かして、出来上がったのです。『どんぐり牧場の構想』は「小さな実でも、大きく育てる」の願いをこめて、先の父の体験の思いをこめて名付けたのです。内容は『家庭の雰囲気の中で、知恵遅れの障がいがある仲間達との協働生活で、養鶏を中心とした農業を営み、「自立・自営・協働・共助」を目標に掲げて、1969(S44)年の夏、私達夫婦を中心に、東京から大月市猿橋町に移り住んだのが始まりです。父は、賀川豊彦先生に師事したピューリタンです。生れは基督教伝来50年後でした。福祉事業家であり、理想主義者でした。開拓者精神が旺盛で、高い理想を掲げて、打ち込むタイプでした。親子二代により始めた事業は現在三代目となり、4代目となるか期待している孫が高校生・中学生に育っています。養鶏を営む「どんぐり牧場」を長男が、ケーキ・クッキーを作る「めばえ」を二男が担当しています。養鶏は3000羽を飼育し、毎日100kg以上の卵を生産していて、ケーキ・クッキーはこのおいしい卵を使って作っています。「食の安心・安全・美味しい」は40年前から心がけており、こだわりの自家配合の飼料を与え、自家労力で配達することで、消費者と生産者の顔が見える営業努力をしています。朝、「主の祈り」を祈り、夕には「日々の糧」を歌って生

